The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初中級文型の補助資料 ： 「かくどる」の内容
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2008, 6, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8302
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初中級文型の補助資料
－「かくどる」の内容－

角道　正佳

【要旨】

初中級文型の授業で使用している『初中級基本文型〈改訂版〉』及び『初中級文型練習問題』を補う目的で、学生に配布している資料を提示し、その資料を配付する目的、意図について解説する。取り上げるテーマは、学習者が意外に難しいと想われるような項目やすでに研究の蓄積があるにもかかわらず、教育面では十分に活用されていない以下のような項目である。助数詞が並列の接続詞を伴った表現、格助詞「に」と「で」、「ないで」と「なくて」、「ために」と「ように」、「れば」と「たら」、「なら」と「たら」、文末表現「よ」と「でしょう」と「ね」、「けっこうです」の意味、「のに」と「けれども」、「ても」、「けど」と「から」、「のだ」、等位接続表現、省略表現、「てから」と「たから」、述語の意味、「の」の省略、具体名詞と「の」と「こと」、受動文マーカー、「という」の有無、否定の位置。

0．はじめに

かつての受講生が私の授業について「かくどる」という言葉を使っていたと、ある非常勤の方が教えてくれた。その意味は「難しいことを言う」であるが、これを聞いて非常に感心してしまった。「かくどる」の「かく」はもちろん「角道（かくどう）」の「角（かく）」である。「かくどうる」でない点が非常にリズミカルであり、大変気に入った。起伏式アクセントのラ行五段活用をする動詞のはずであるが、ほかの活用形は知らない。自虐的に解釈すると、「学生にわかろうが、わかるまいが、自己満足のために、思いついたことを、わざわざ授業でひけらかす」ということになろうか。授業では資料を配付する際、「これは試験には出しません。あなた方の今後の勉強のためにあげるんです」と断っている。以下述べるのはその「かくどる」の内容である。

現在初中級の文型は『初中級基本文型〈改訂版〉』及び『初中級文型練習問題』を教科書として使用し、週6コマあたりの授業を14、5週行っている。時間割の構成上、すべてのコマは別の教師が担当している。この教材で授業を行うと、場合によっては教科書で扱われている項目をすべて教えきって、なおかつ時間をもてあまし、急いで別の教材を用意し配布することがある。私が担当する時間では、むしろできるだけ進まないように配慮し、復習を兼ねながら、もう少し詳しく説明しておくべき事柄に焦点を当て、配付資料を作成している。この資料の中には、誰かある人の論文をほぼそのまま利用させてもらっているものもある。今となっては誰の論文か出典が定かでないものが含まれている。

「かくどる」の内容は厳密にいうと、学習者の油断に警鐘を鳴らす項目も含まれている。初中級クラスに振り分けられた学生が『初中級基本文型』の最初のほうの課を見ると、今さらなぜこんなことを勉強する必要があるのかと思うかもしれない。こういった学習者には、助数詞を含んだ表現が並列している場合の係助詞、格助詞の現れ方を提示しどれが正しく、どれが間違っているかという問いを発してみる。完璧に答えられる者はいないであろう。

私自身が文法指向であり、コミュニカティブな教授法には関心が薄いため、以下述べること

は、どういう文脈でどういうように使うものであるかという視点はあまり触れられていない。最大の関心は、二つあるいはそれ以上の類似した表現がある場合、どのように使い分けられているかという点にあり、優秀な学習者であれば、必ず疑問を持つ事柄である。初級レベルでも扱われるものも含まれるが、用例を増やしておきたい。さらにもう一歩突っ込んだ説明が望まれる項目を取り上げる。その最たるものは「のだ」である。一筋縄ではいかない項目であるが、少なくとも、教科書にある以上の多彩な用法が存在することを学習者には知っておいてもらいたいものである。正しく使えるのは上級レベルでも難しい。また、見落とされている項目を取り上げる。学習者は教室で習おうが習うまいが、長期的には修得できそうな項目も含まれているという意味では、敢えて説明する必要のないものもあるが、私自身の解釈による「かくどる」では必要な項目である。言語形式は知っていても、どういうときに使えるのかが教科書からは明示的でないものがる。例えば、「し」の用法は、並列を表す形式「と」、「や」、動詞のて形、形容詞（イ形容詞）の「くて」形、形容動詞（ナ形容詞）の「で」形等とも関連づけて説明されるべきものである。こういった観点が意外と忘れられている。

1．女の子が9人と男の子が12人います

井上理恵、清水邦子著（1990）の第2課に表題の文が出現する。これは聴解のテキストなので、学習者は「女の子」「9人」「男の子」「12人」という語彙が聞き取れれば、全体の意味はわかった気になるであろう。しかしこの文には「女の子と男の子がいます」や「女の子や男の子がいます」にはない重要な文法事項が含まれている。つまり、「9人」と「12人」が付け加わったことによって格助詞「が」が2度出現するという現象である。

助数詞を含む表現における数量詞遊離（quantifier float）の現象は言語学でさかんに論じられてきたにもかかわらず、表題の文型における格助詞等の扱いについての論考はあまり見かけない。この現象は「が」に限らない。述語動詞が他動詞であれば「女の子を9人と男の子を12人見かけた」のように「を」が2度出現することになる。「と」を「や」に変えるだけで非文になるという事実も注意が必要である。

表題の文に続けて「犬や猫もいます。犬は3匹猫は5匹います」が現れる。後半の文に注目されたい。「が」を「は」に換えても2度必要であることに変わりはないが、「と」という接続表現が使用できなくなるという点が非常に大切である。「や」はもちろん使用不可能である。この文型を説明する段階で「は」と「が」の使い分けについて深く立ち入ることは避けるべきであるが、「は」と「が」で文法上の大きな違いがあることは学習者に認識させておく必要があるように思われる。「～が・・・と、～が・・・」が可能なのに対して、「～は・・・と、～は・・・」が不可能なのなぜかという質問に対しては、「と」の領域（scope）に「が」は入ることができるけれども、「は」は入ることができないと説明すればよい。次のように図示できる。【　】が「との領域」、［　］が「がの領域、《　》が「はの領域」を表す。

（1）【［～が・・・］と、［～が・・・］】

「が」の領域

「と」の領域

（2）*【《～は・・・》と、《～は・・・》】

「は」の領域

「と」の領域

ただし次の場合と混同してはならない。

（3）［【～と～】が］

「と」の領域

「が」の領域

（4）《【～と～】は》

「と」の領域

「は」の領域

実はこういった現象は、「ラジオをを聞く」と「音楽を聞く」をつないで「ラジオを音楽を聞く」とは言えないとか、「日本語を勉強をしています」、「東京に目黒に住んでいます」、「駅の前に本屋へ行きました」等が非文であるという、非常に強い日本語の一般的な規則「同一節に同じ種類の格助詞は2度出現できない」の例外となる。

初中級に振り分けられた学生の自信をうち砕くために、次の穴埋めをやらせることがある。

（1）　駅（　）前（　）本屋（　）あります。

（2）　駅（　）前（　）本屋（　）行きました。

（3）　駅（　）前（　）本屋（　）買いました。

（4）　駅（　）前（　）本屋（　）本を買いに行きました。

（5）　駅（　）歩きました。

（6）　駅（　）歩いて行きました。

完璧に正解する学生にはまだ出くわしていない。

2．家に手紙を書く／家で手紙を書く

「に」と「で」はどう違いますかという質問を初中級クラスの学生から受けたことはない。すでに既習の項目であり、完全には習得していないまでも、違いがあることは認識していると思われる。そこでどちらも使えそうで意味が異なる場合を提示し、理解の度合いを確かめる必要が生じる。表題の文の違いは日本人には明白であろう。「家」が単独で（＝裸で）使用できるのは日本語の特徴の一つである。「家」を限定する何らかの文法的な標識（親の／自分の）を付加するか、動詞を「出す」と「書く」に置き換えるとわかりやすくなる。前者のキーワードは「（結果的に）手紙が存在する場所」、後者のキーワードは「書く人がいる場所」である。これを納得させられると、「黒板に字を書く」と「机で字を書く」の違いは容易に理解できると思われる。ついてに「机に字を書く」（落書き）も教える。続いて「車がここに止まった」と「車がここで止まった」を提示し、「（結果的に）車がある場所」と「運転している人が車を止めた場所」の違いとして説明する。さらに、「ボールがここに止まった」と「ボールがここで止まった」の違いについて触れたくなるが、しないでおくことも多い。後者の「で」のキーワードは私の母語話者としての言語直感では「限界」であるが、異論もあるかもしれな

い。「ベッドに寝る」と「ベッドで寝る」も提示することがある。後者のキーワードは「選択」（したがって「手段」に近くなる）である。「本当は畳の上に布団を敷いて寝たかったのに、（しかたなく）ベッドで寝た」というニュアンスを感じる。もっとうまい説明があったらご教示を願いたい。ではなぜ「椅子に座る」はいいのに、「椅子で座る」はだめなのか、わからないと答えるしかない。

3．朝ご飯を食べないで学校へ行った／窓が閉まらなくて、一日中ストーブをつけていた

「なくて」と「ないで」の使い分けについては、かねてからきれいに整理できないものかと考えていたが、先行研究のいくつかを読んでみても、一向にわかったような気になれなかった。形容詞述語文、名詞述語文には「この映画は面白くなくて、くだらない」「あの人は男でなくて女だ」のように「なくて」のみ可であり、慣用的な表現の場合、「～ないでください／ほしい／ある」、～なくて／ないでいいですか」「～なくて／ないでよかった」のように用法が固定しているので、あまり問題はないが、動詞述語文の場合が問題になる。

こういった問題は、教える側が十分に納得し、メモを見ないですぐにでも他人に説明できる状態でなければ、学習者を納得させることはできない。そういう意味では未だにメモなしでは説明に自信が持てない項目である。そういった状況にあって、あるとき、目から鱗が落ちるような論文に出くわした。以下その論文を紹介し、コメントを加える。残念なことに出典が不明である。私の独創ではないことだけは明記しておく。

表1　「なくて」と「ないで」

	動詞文	従属節の動詞	主節の動詞	なくて	ないで
A	従属節の主語＝主節の主語	＋	＋	＊	OK
B		＋	－	OK	OK
C		－	＋	OK	？＊
D		－	－	OK	OK
E	従属節の主語≠主節の主語	＋	＋	OK	OK
F		＋	－		
G		－	＋	OK	＊
H		－	－	OK	？＊

＋：自制性（controllable）　－：非自制性（non-controllable）

意味論の分野に意義素を抽出するというものがあるが、意義素なるものは抽象的すぎて、どうにでも解釈でき面があるため、「なくて」と「ないで」の違いを説明するには向かないように思われる。しかしどの条件でどちらが使用可能であるかという観点から整理できれば、学習者にはきわめて有益である。表1は、従属節の主語と主節の主語が同一であるか否か、述語が自制的（controolable）であるか否かという基準だけに焦点を当て、「なくて」と「ないで」のどちらが使えるかを判定したものである。結果と例文を以下に述べる。表現方法などは変えてある。

A　朝ご飯を食べ｛*なくて／ないで｝、学校へ行った。
　　授業のあと、すぐ家へ帰ら｛*なくて／ないで｝、映画を見に行った。
B　あの人は予防注射をし｛なくて／?ないで｝、病気になった。
C　授業のあとすぐ家へ帰れ｛なくて／?*ないで｝、映画を見に行った。
　　太郎は英語ができ｛なくて／*ないで｝、しぶしぶ英語塾へ行った。
　　そんな簡単な問題も解け｛なくて／??ないで｝、受験をあきらめることにした。
　　一つの袋に入りきら｛なくて／?ないで｝、二つに分けた。
D　太郎は書き取ができ｛なくて／ないで｝、困っています。
E　パーティーには田中さんが来｛なくて／ないで｝、山川さんが来た。
F　該当例なし
G　窓が閉まら｛なくて／*ないで｝、太郎は一日中ストーブをつけていた。
　　弟が泳げ｛なくて／*ないで｝、太郎が代わりに泳いだ。
H　弟が泳げ｛なくて／?ないで｝、私はほっとした。
　　息子が書き取りができ｛なくて／?ないで｝、私は本当に困っています。
　　雨が降ら｛なくて／ないで｝、晴れた日が続いた。

4．体を丈夫にするために毎日運動します／体が丈夫になるように毎日運動します

「ために」と「ように」の使い分けも学習者から繰り返し問われる質問である。「なくて」と「ないで」と同様、主語の同一性、述語の自制性の観点からかなりきれいに整理できる。初中級レベルでは、整理できる範囲を提示するだけで十分であろう。

表2　「ために」と「ように」

	動詞文	従属節の動詞	ために	ように
A	従属節の主語＝	＋	OK	*
B	主節の主語	－	*	OK
C	従属節の主語≠	＋	*	OK
D	主節の主語	－	*	OK

＋：自制性（controllable）　－：非自制性（non-controllable）

A　わたしは体をじょうぶにするために（わたしは）毎日運動します。
　　わたしは教養を高めるために（わたしは）本を読みます。
　　切符を買うために列に並びました。
B　わたしは体がじょうぶになるように（わたしは）毎日運動します。
　　わたしは教養が高まるように（わたしは）本を読みます。
　　わたしは試験にパスできるように（わたしは）よく勉強します。
　　わたしは試験に落ちないように（わたしは）よく勉強します。
C　学生が教養を高めるように大学は図書館を充実させます。
　　子供がよく勉強するように親は環境を整えました。
D　よく見えるように高いところに貼りました。

だれでも理解できるようにやさしく 書きました。
風が 吹き込まないように窓を 閉めました。

初中級以上のレベルでは従属節が否定形でも自制性の判断が話者に依存する次のような例文の提示が必要になる。（例文は酒入郁子、佐藤由紀子、桜木紀子、中村史子貴美子、中村壽子、山田あき子（1991:182183））

失敗しない｛ために／ように｝慎重に行動する。
受験戦争に負けない｛ために／ように｝体力をつける。
太らない｛ために／ように｝エアロビックスをする。
遅刻しない｛ために／ように｝全力で走る。
忘れない｛ために／ように｝繰り返し練習し頭にたたき込む。

5．四月になれば桜が咲きます／佐藤さんが来たらいっしょにテニスをしましょう

近畿方言話者で外国人に日本語を教えている人の中には「れば」を使わなくてもすべて「たら」でことが足りると思っている人もいたようである。本来の近畿方言に「れば」がほとんど用いられないのは事実であるが、標準語（敢えて共通語という表現は避ける）を教える際、「れば」はどうしても必要になる。初級及び初中級レベルで必要な事柄は、主節（あるいは文全体）の持っている言語形式によって比較的簡明に説明できる。「～ましょう」「～てください」「～なさい」「～てはいけません」「～ないでください」「～なければなりません」「～なくてもいいです」等及び「～た」の場合、「たら」を使うと言えばよい。以上の表現を文法用語を用いて表現すると、勧誘、依頼、命令、禁止、否定命令、義務、不必要、過去となる。過去を除くと、基本的には二人称主語が関与しうるモダリティー（敢えてモダリティという表記を避ける）を伴っている。これ以外の場合は、陳述や話者の意志である。

表3　「れば」と「たら」

	文脈A			文脈B					文脈C
	陳述	意志	勧誘	命令、依頼	許可	禁止	義務	不必要	過去
れば	OK	OK	*	*	*	*	*	*	*
たら	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK	OK
例	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)

動詞

（1）四月に｛なれば／なったら｝、桜が咲きます。
（2）あなたが｛買えば／買ったら｝、私も買います。
（3）佐藤さんが｛*来れば／来たら｝、いっしょにテニスをしましょう。
（4）駅に｛*着けば／着いたら｝、電話してください。
（5）宿題をして｛*しまえば／しまったら｝、遊んでもいいです。
（6）この注射を｛*すれば／したら｝、今晩お風呂に入ってはいけません。

（7）｛*終われば／終わったら｝、先生に言わなければなりません。
（8）手紙を｛*出せば／出したら｝、電話しなくてもいいです。
（9）教室に｛*入れば／入ったら｝、もう皆来ていた。

（2）の「れば」と「たら」には母語話者の私には「仮定」及び「仮定または既定」の違いがあるように感じられる。次の形容詞文や否定文でも同様である。「仮定」の場合は次に述べる「なら」に置換可能であるが、（1）は仮定にはなり得ないことを説明する必要がある。ただし、初中級で教えても身に付くかどうかは心許ない。

形容詞
（2）｛安ければ／安かったら｝、買います。
～ない
（5）｛分からなければ／分かなかったら｝、漢字で書かなくてもいいです。
（6）｛分からなければ／分からなかった｝、先生に聞かなければなりません。

「れば」には提案、アドバイスの意味合いがあるのに対して、「たら」にはそれ以外に警告の意味合いがある。つまり、「れば」は話し手がその事態が起こることを期待している場合、「たら」は話し手がその事態が起こることを望んでいない場合と言い換えてもよい。したがって花瓶を運んでいる人に、「落とせば、割れますよ」は適切ではなく、「落としたら、割れますよ」のほうが適切に感じられる。

6．外国へ行くならお金がいります／外国へ行ったらお金がいります

「れば」「たら」「なら」の使い分けは上級レベルの学習者からでさえ質問がある項目である。最近出版された益岡隆志編（2006）を見ても、レバ形式：事態命名レベルにおける条件設定、事態間の一般的因果関係、タラ形式：現象レベルにおける条件設定、個別的事態間の時間的依存関係、ナラ形式：判断レベルにおける条件設定、前件においてある事態が新であると仮定する、のようなことが書かれている。問題は「事態命名レベル」「現象レベル」「判断レベル」といったキーワードが何を言おうとしているのか明示的ではないことである。ある概念を説明したいために、あるキーワードを与えた（名付けた）だけのようにも思われる。つまり、そのキーワードを自明のものとして把握できる者に限り、上述の説明が活きるのであって、キーワードを独立に定義することは可能なのかという疑問が生じる。わかるものには直感的にわかるが、わからない者にはいつまでもわからないわけである。

「なら」と「たら」で意味が逆になるわかりやすいケースがある。それが表題にあげた例文である。「なら」は外国へ行く前にお金が必要、「たら」は外国へ行ってからお金が必要になることを表しており、「外国へ行くとき」と「外国へ行ったとき」の違いにきれいに対応する。従属節で表される時と主節で表される時の順序関係が逆になっているケースである。前者を逆行（regressive）関係、後者を順行（progressive）関係と呼ぶことにする。音声学の逆行同化、順行（あるいは進行）同化のイメージである。「～るとき」と「～たとき」が常にこういう逆の関係になっているなら、事態は簡単であるが、実はそうではない、「ご飯を食べるとき箸を使います」は逆行関係ではなく、「ご飯と食べる」と「箸を使う」が同時（simulta-

neous）である。「バス停に着いたとき、バスの扉が閉まりました」は順行関係と判断するには微妙すぎる。むしろほとんど同時である。前者の同時は二つの行為が平行（あるいは重複して）同時であるのに対して、後者の同時は二つの行為が瞬間的にほぼ同時である。前者の二つの行為は継続しているのに対して、後者の二つの行為は継続していないという違いがある。

表4　「なら」と「たら」

<table>
<tr><td rowspan="3"></td><td colspan="3">なら</td><td colspan="3">たら</td></tr>
<tr><td colspan="3">S＜E
未来</td><td colspan="2" rowspan="2">E＜S
過去</td></tr>
<tr><td colspan="2">S＜R
仮定</td><td>R＜S
既定</td><td>S＜R
仮定</td><td>R＜S
既定</td></tr>
<tr><td>ケース1</td><td>R←E</td><td></td><td></td><td>R→E</td><td></td><td rowspan="6">該当例なし</td></tr>
<tr><td>ケース2</td><td>R←E</td><td>R→E</td><td></td><td>R→E</td><td></td></tr>
<tr><td>ケース3</td><td></td><td>R→E</td><td></td><td>R→E</td><td>R→E</td></tr>
<tr><td>ケース4</td><td></td><td>R→E</td><td>R→E</td><td>R→E</td><td></td></tr>
<tr><td>ケース5</td><td></td><td>R→E</td><td></td><td>R→E</td><td></td></tr>
<tr><td>ケース6</td><td colspan="2">R＝E</td><td colspan="3">該当例なし</td></tr>
<tr><td>ケース7</td><td colspan="5" rowspan="2">該当例なし</td><td>R←E</td><td></td></tr>
<tr><td>ケース8</td><td></td><td>R→E</td></tr>
</table>

「なら」と「たら」の違いを説明するには、さらに発話時（Speech time）の概念が必要である。従属節の表す時をReferent time（R）、主節の表す時をEvent time（E）と表し、発話時を（S）で表すことにして、いくつかのケースに分類して見ると次のようになる。つまり「事態命名レベル」「現象レベル」「判断レベル」といったキーワードをいっさい使わないで、「なら」と「たら」の用例を分類することを試みるわけである。

キーワードは、R＝referent time（従属節が表している時）、E＝event time（主節が表している時）、S＝Speech time（発話時）、定義として順行（従属節の時が主節の時に先行する、R←Eと表記する）、逆行（主節の時が従属節の時に後続する、R→Eと表記する）、同時（従属節の時と主節の時が同時、R＝Eと表記する）である。さらに発話時が先行する場合をS＜X、発話時が後続する場合をS＞Xと表記する（XはEまたはR）。また「仮定」と「既定」という概念をS＜R、R＜Sの解釈として用いる。

ケース1　なら：逆行、たら：順行

外国へ行く<u>なら</u>お金がいります。　≒外国へ行<u>く</u>とき、お金がいります。
外国へ行っ<u>たら</u>お金がいります。　≒外国へ行っ<u>た</u>とき、お金がいります。
あの人が来る<u>なら</u>、僕は帰るよ。
あの人が来<u>たら</u>、僕は帰るよ。

（あなたが）この本を読むなら、（わたしは）貸してあげますよ。
（わたしが）この本を読んだら、（あなたに）貸してあげますよ。
（あなたが）この本を読んだら、（あなたに）貸してあげますよ。
この本を読むなら、この本も読むといいですよ。
この本を読んだら、この本も読むといいですよ。

ケース２　なら：逆行、順行、たら：順行

あの人に教えるなら、（その前に）僕にも教えてください。　仮定
あの人に教えるなら、（その後で）僕にも教えてください。　既定
あの人に教えたら、僕にも教えてください。
あの人に貸すなら、（その前に）僕にも貸してください。　仮定
あの人に貸すなら、（その後で）僕にも貸してください。　既定
あの人に貸したら、僕にも貸してください。

ケース３　なら：順行、たら：順行

始めるなら終わらなければならない。　仮定
始めたら終わらなければならない。　仮定
≒　もう始めているので、終わらなければならない。　既定

ケース４　なら：順行、たら：順行

皆が嫌だというならやまましょう。　仮定
≒　皆が嫌だというのでやめましょう。　既定
皆が嫌だといったらやめましょう。　仮定

ケース５　なら：順行、たら：順行

新しいカメラを買うなら、私の写真を撮ってください。
≒　新しいカメラを買うなら、（買った後で）、私の写真を撮ってください。
新しいカメラを買ったら、私の写真を撮ってください。

ケース６　なら：同時、たら：不可能

あした東京に行くなら、いっしょに行きましょう。
太郎、勉強するなら、早くしてしまいなさい。
山に行くなら、レインコートを持っていきなさい。
今日泳ぐなら、由比ヶ浜で泳ぎなさい。
買うなら、今のうちですよ。

ケース７　なら：不可能、たら：順行

教室に入ったら、もう皆来ていた。

ケース８　なら：不可能、たら：順行

先生が来たら、皆立ち上がりました。

７．おいしいですよ／おいしいでしょう／おいしいですね

「よ」と「ね」の使い分けについて質問されることはあまりないけれども、学習者が正しく使い分けているようには思えない。説明しましょうかと言うと、いいえ結構ですという学生はいない。ついでに「でしょう（上昇イントネーション）」も説明したほうがよい。これの違い

をもっともうまく説明できる例として、選んだのが表題の表現である。話し手と聞き手の間の情報のギャップの観点から、状況を設定すれば、かなりうまく説明できる。私は食べたことがあるけれども、あなたは食べてことがないと私が思っている場合、何か食べ物を目の前にして「おいしいですよ」と発言すると、話し手は聞き手に新しい情報を伝えていることになる。それを聞いて聞き手が食べ始めたとき、話し手が聞き手に「おいしいでしょう」と言うと、おいしいことがわかったと思うけれども、どうですか、私は「はい」という返事を期待していますという意味を表している。「おいしいですね」は「おいしいですよ」という問いかけの返事としても使えるし、話し手と聞き手が初めて食べ始めたときに、相手に同意を求める場合にも使える点で、事情は少し複雑である。「おいしい」を「難しい」に置き換えて、教師と学生の関係での発話を想定することもできる。「難しいですよ」は試験の始まる前、「むずかしいでしょう」は試験が始まったところ、「難しいですね」は試験が始まってから学生同士あるいは問題を初めて見た教師と学生間の会話、あるいは学生が先生に対する発話として理解できる（ただし試験中に話すのは問題あり）。疑問助詞の「か」を付け加えて、この関係を次のように図示する（○はそのことを知っている、？はそのことを知らない、→は伝達の方向、〉は左側の人の方が先にその情報を持っている、＝情報を同時に得た、を表すきわめてあいまいなイメージとして用いる）。

表５　文末表現

	話し手		聞き手
～よ	○	→	？
～でしょう	○	＞	○
～ね	○	＝	○
～か	？	←	○

次に形容詞を「行く」のような動詞に置き換える。「～でしょう」と「～ね」は疑問の意味を持っていて肯定の返事を期待していることを説明する。その際、「行く」のは誰かという点、つまり主語が一人称であるか二人称であるかに注意を向ける（三人称の場合は取り上げない）。「～よ」の主語は一人称、「～でしょう」と「～ね」の場合は二人称であることを確認する。「ちょっと郵便局まで行ってきますね」とか「ちょっと郵便局まで行ってきますからね」のような場合は「～ね」が一人称主語と共起しているが、この段階では取り上げないことにする。ついでに「～か」の主語が一人称ではありえないことも付け加える。これも「わたしも～しなければなりませんか」のように「～か」が一人称主語と共起することは可能であるけれども、この段階では取り上げないでおく。以上のことは、通常「わたし」や「あなた」を表現しなくてもよいという非常に大切な日本語の特徴を示している。文末表現を特に普通体では適切に使用する必要があることも認識させる。

次に動詞「ある」に置き換える。この場合は主語の制約が「行く」とは違うため、形容詞に近い使い分けになる。「～でしょう」には場合によっては聞き手を憤慨させるようなケースもありうることを忘れず付け加えておく。ただし、この内容について明示的に説明する自信がないので、実例だけを示しておく。アパートを探していた留学生が水洗トイレでなくくみ取りト

イレだったのにがっかりして、アパートの大家さんに、「やっぱり水洗のほうがいいでしょう」と言ったことがあったらしいという話を聞いた。これを聞いた大家さんは憤慨しないまでも、いい気分ににはなれなかったであろう。

「ね」と「ねえ」の違いについては方言差があるように思われるので、あまり詮索しないでおく。「先週渡した資料持ってきていますか」の意味で「ありますね」と「ありますねえ」の使い分けは、岡山方言が母語である私と京都方言話者では微妙な違いがあるようである。私の語感では、前者（あります<u>ね</u>）は確認以前または確認後、後者（あります<u>ねえ</u>）は確認後（例えば、学生がカバンから机の上に取り出した後）に使用するが、京都方言話者の場合は、後者（<u>ありますねえ</u>）を確認前に使用可能なようである。

8．けっこうです

日本語はあいまいで「はい」か「いいえ」かをはっきり言わないとよく言われる。「けっこうです」もその例にもれず、Yes, Please かNo thank youかあいまいであると多くの外国人は思っているかもしれない。しかし、これはその前の発話の形式に注意すれば、はっきりわかるはずのものである。「～てもいいですか」と「～ましょうか」に対する「けっこうです」の意味を考えれば明白になる。日本語は主語のみならず誰のためにする行為であるかを明示的に表さなくてもよい言語である。英語に訳すと、May I do it <u>for me</u>?及びShall I do it <u>for you</u>?に対応するであろう。for～の部分が受益者（benefactrive）であり、それに対する「けっこうです」はYes, please do it <u>for you</u>及びNo, you need not do it <u>for me</u>に対応する。この関係に注意すれば、意味を取り違えることはない。コメントとして用いられる「（それは）けっこうですねえ」は、もちろん別の用法である。

「あげる」「もらう」「くれる」の使い分けが外国人学習者にとって難しいのは3項対立するという事実のみならず、主語、間接目的語に相当する人称代名詞を日本語では通常省略するからであり、文の途中で主語が入れ替わることがあるからである。「けっこうです」にかかわる問題の一つはここにある。同様に、「パンとライスとどちらにいたしましょう」と「パンとライスとどちらになさいます（か）」、「毎度阪急バスをご利用いただきましてありがとうございます」と「毎度阪急バスをご利用くださいましてありがとうございます」のような例がある。また前述の「（あなたが）この本を読むなら、貸してあげますよ」と「（私が）この本を読んだら、貸してあげますよ」は主語が省略されても、意味があいまいにならないケースである。

9．のに／けれども

「のに」は第24課の4に現れる表現であり、5つの例文のうち4つは「ます」「ました」で終わる陳述文である。これらの「のに」を「けれども」と置き換えても何の問題も生じない。残る1例は「おいしいのに、なぜ食べないのですか」という修辞疑問文であり、この文の「のに」は「けれども」に置き換えられない。いったいどういう場合に「のに」を「けれども」に置き換えられないのかという点を十分に理解させなければ、「のに」の理解にはつながらない。残念なことに「のに」が使用できて「けれども」が使用できない場合を示すには、初中級のレベルでは難しいと思われる次のような表現について教えなければならない。主節（あるい

は文全体）が（1）感嘆の終助詞「か」、（2）評価の副動詞「とは」、（3）評価の副動詞「なんて」、（4）判断辞「わけがない」、（5）修辞疑問（反語）、（6）反語の「か」、「ものか」のような表現になっている場合、従属節に「のに」を用いることは可能であるが、「けれども」は不可能である。以上の知見は、戸村佳代（1989）を参考にしたものである。具体例を以下に示す。

（1）忙しい｛のに／*けれども｝わざわざ来てくれたのか。

（2）こんなに小さい｛のに／*けれども｝一人で来たとは。

（3）人が使っている｛のに／*けれども｝黙って持っていくなんて。

（4）はさみが一挺しかない｛のに／*けれども｝毛抜きが二つあるわけないじゃないか。

（5）金が湯水の湧くように使える｛のに／*けれども｝どうして昔の女とその子供に分けてやっては悪いというのか。

（6）これまでなんとか生き延びてきた｛のに／*けれども｝むざむざ死んでたまるか。

10. ても

「ても」は第20課5で扱われているけれども、「のに」や「けれども」との関係は明記されていない。今尾ゆき子（1993）における論考を参考に簡単にまとめてみる。

「ても」は使えるが、「のに」と「けれども」が使えないのは、（7）「仮に」、「たとえ」があるとき、（8）不定の要素（何度、誰か、…）があるとき、（9）肯定と否定の反復形式である。「ても」と「けれども」は使えるけれども「のに」が使えないのは、（10）依頼、命令、勧誘、意志の文、（11）主節に意志動詞の現在形（ル形）があるとき、主語が一人称の場合である。ついでに述べると、「のに」は使えるけれども、「ても」と「けれども」が使えない場合がある。それは、（12）特定の時を表す副詞語句（昨日、今朝、さっき、…）があるときである。ただし、（13）主節が非過去形であれば、「ても」は仮定条件を表し、「のに」と「けれども」は既定条件を表すが、（14）過去形の場合は「ても」も「のに」も「けれども」も既定条件を表す。

（7）彼女は仮に子供が｛病気でも／*病気なのに／*病気だけれども｝、医者に連れて行かない。

彼女はたとえ子供が｛病気でも／*病気なのに／*病気だけれども｝、医者に連れて行かない。

（8）何度｛磨いても／*磨いたのに／*磨いたけれども｝、きれいにならなかった。

（9）*努力したのに努力しなかったのに成功しなかった。

努力しても努力しなくても成功しなかった。

*努力したけれども努力しなかったけれども成功しなかった。

（10）ベルが｛鳴っても／*鳴ったのに／*鳴ったけれども｝まだ部屋に入らないでください。

｛元気でも／*元気なのに／元気だけれども｝無理するな。

雨が｛降っても／*降るのに／降るけれども｝行きましょう。

（11）私は｛呼ばれなくても／*呼ばれないのに／呼ばれないけれども返事をする。

（12）昨日｛*買ってもっ／買ったたのに／買ったたけれども、壊れている。

(13) 子供が {病気なのに／病気だけれども} 医者に連れて行かない。　(既定条件)
子供が病気でも医者に連れて行かない。　(仮定条件)
(14) 子供が {病気なのに／病気でも／病気だけれども} 医者に連れて行かなかった。
(既定条件)

11. 先生、時間ですから／先生、時間ですけど

初級レベルの学生に上述の表現の後ろにどんな言葉がが続くかを言わせてみたことはないけれども、「から」は「雨が降っていますから、行きません」の「から」、「けど」は「雨が降っているけ（れ）ど（も）、行きます」の「けど」のような知識しかないかもしれない。しかし、例えば学生が授業を終えてもらいたいと思っているとき、前者の言い方をするより、後者の言い方をするほうが協調的で丁寧に聞こえる。その理由は前者の表現は、聞き手に選択権を与えていないのに対して、後者は与えているからであると考えられる。前者は話し手の意志あるいは聞き手に対する命令（依頼、要求）を表すのに対して、後者は話し手の希望や意見の表明を表していると解釈できる。「寒いですから、（窓を閉めましょう／閉めてください）」と「寒いんですけど、（窓を閉めてくれないかなあ）」の間にも同様の違いがある。しかし、後者を「寒いですけど」と言うと舌足らずになる。

Chinami, Kyoko (1989) には、聞き手が知っているはずの周知の事柄には「のだ」が使用できないとして、「明日は天皇誕生日 {*なんですが／ですが} お天気はどうでしょうねえ」という例を挙げている。しかし「お金がないのですから、無駄遣いしないでください」は聞き手が知っているはずの事柄に「のだ」が使用可能である。この違いは「が／けど」と「から」の違いが関係している。

12. のだ

「のだ」についてもっともよく見られるキーワードは「説明」である。しかし「説明」は「のだ」の持っている多彩な意味のうちの一つにすぎない。初級レベルでも教えておくべき事柄として、疑問文における前提がある。「どこへ行くんですか」は「どこかへ行く」という前提に対して「どこ」という疑問がある。すでに答えを知っている教師が学生に答えられるかどうかの確認する場合は上述の形式ではなく、「・・・はどこへ行きますか」という形式で質問が発せられる。「ニューヨークでオペラを見たのですか」のタイプのYes-No疑問文に現れる「のだ」も「前提」という概念で説明可能である。ただし「前提」の概念は万能ではない。「いつ日本に来たんですか」と「いつ日本に来ましたか」の違いは微妙であり、説明に窮する。とりあえず後者は詰問調に近い（警官が尋ねているような状況）と思われる。ただし「また来たんですか」の主語が二人称または三人称であるのに対して、「また来ましたか」の主語は三人称でしかありえないことは、主語を省略する日本語では重要な違いとなる。会いたくない聞き手に対しては前者が用いられるはずである。同様に、「そろそろ始めますか」の主語は一人称、「そろそろ始めるんですか」の主語は二人称または三人称である。「まっすぐ行きますか」の主語は一人称複数形または二人称、「まっすぐ行くんですか」は一人称主語（つなり「まっすぐ行ったらいいんですか」）もしくは二人称（つまり「まっすぐ行くつもりですか」）になる。

「あなたが憎いから叱るのではありません」のタイプの否定のscope（いわゆる部分否定と言われているもの）に関する表現も重要である。

以上の例は「のだ」の有無によって意味に違いがあり、「のだ」が必要な場合になければ舌足らずな感じがするものである。一方「のだ」を省略してもさほど不適切ではない場合がある。こういった場合の「のだ」の意味が多くは「説明」とか「強調」とかという用語で説明されてきた。吉田茂晃（1988）は「のだ」構文に関して以下のように分類している。ここで用いられているキーワードは非常に有益である。「換言」は「のだ」が必須の要素であるが、それ以外の例では「のだ」を省略できるものが多い。「換言」以外は対話の場面での表現であるが、β1，2は独り言もありうる。

換言

（1）肌が荒れているのはビタミンが不足しているのだ。

α1　情報提示（話し手→聞き手）

1．告白（話し手しかわからないこと）

（2）ごめんなさい。ガラスを割ったのは僕なんです。

（3）止めないでくれ。私だって辛いのだ。

2．教示（聞き手が知らないこと）

（4）お月様ではねえ、ウサギがおもちをついているんだ。

（5）この辺りでは夜8時前に店が閉まるのだ。

（6）ご覧下さい。この行程はすべてコンピュータによって制御されているんです。

3．説得（聞き手が信じられないこと）

（7）君がどう言おうと俺はＵＦＯを見たのだ。

（8）評論家が何と言おうとこの映画は面白いんだ。

α2　実現すべきこと（話し手→聞き手）

1．決意（話し手がなすべきこと）

（9）おれはどうしてもこれをやり遂げるのだ。

（10）俺は行くぞ。行くと言ったら行くんだ。

2．命令（聞き手がなすべきこと）

（11）立て、立つのだぞ。

（12）危ないから、僕が合図をするまでじっとしているんだ。

β　受け止め（話し手）

1．発見、得心（初めて知ったこと）独り言も可

（13）（辞書を調べて）そうか、「知音」というのは“親友”のことなんだ。

（14）ははあ、あいつは自分だけ逃げるつもりなのだ。

2．再確認（忘れていたこと）独り言も可

（15）しまった。銀将は真横へは進めないのだ。

（16）すっかり忘れていたなあ。あいつは阪神ファンなんだ。

3．確認（←相手）

（17）へー、じゃあキミはひとりっこなんだ。

（18）あー、そうなんだ。

(19) じゃ、君の神戸の家にはいま誰も住んでいないのだ。

(20) あ、じゃ、君はもう帰るんだ。

以上の観点以外に、「のだ」に関して、前述のChinami, Kyoko (1989) は目上の人に対しては「のだ」の使用が避けられるという事実を指摘している。

(A) 先生「山田君、君はどこで生まれたんですか。」
　　学生「東京で？生まれたんです／生まれました。

(B) 学生「先生はどこでお生まれになったんですか。」
　　先生「東京で生まれたんです（よ）／生まれたたんだ（よ）／？生まれたよ。

(C) 先生「昨日やっぱりいたんですか。
　　学生「ええ、いました。」

(D) 先生「昨日やっぱりいたんですか。」
　　同僚「ええ、いたんです（よ）。」

13. 等位接続表現

名詞＋名詞は「パン {と／や} ミルク」のように「と」または「や」、形容詞＋形容詞／形容動詞は「広くて明るい」のように「くて」、形容動詞＋形容詞／形容動詞は「親切で優しい」のように「で」、動詞＋動詞は「朝早く起きて散歩します」のように「て／で」で接続することは、初級レベルで必ず学習する項目である。しかし次の文をつないでくださいと言うと、必ずしも期待するような答えは得られない。

(1) たばこを吸ってはいけません。　＋　ガムをかんではいけません。
(2) たばこを吸ってもいいです。　＋　ジュースを飲んでもいいです。
(3) 宿題を出さなければなりません。　＋　スピーチを覚えなければなりません。
(4) 毎日漢字を覚えたほうがいいです。　＋　友達と日本語で話したほうがいいです。
(5) 明日は雨が降るでしょう。　＋　風が強いでしょう。

学生はたいてい「～て」形でつなごうとするけれども、(1)，(2) はそれではまずい。(1) ～ (4) をつなぐ方法の一つは「～たり～たりする」の形式を用いて文末の共通する部分を続ければよい。しかしもう一つ別の方法があって、「～し」を使えばよいということにはなかなか気がつかない。「～し」を使えば (5) の場合も可能である。これらの場合は文末の表現を繰り返さなければならない。「・・・ます」でも「・・・ません」でも「～し」を使ってつなぐことができる。しかし、文末に「よ」や「ね」があると「～し」でつなぐことはできなくなる。同様に、次の場合（命令、禁止、勧誘）もできない。

(6) 事務室に来てください。　＋　ゆっくり話してください。
(7) たばこをすわないでください。　＋　ガムをかまないでください。
(8) 映画を見にいきましょう。　＋　あの喫茶店で休みましょう。

等位接続表現にはさらに面倒な問題がある。「赤いチューリップがあります」と「黄色いチューリップがあります」をつなぐと「赤いチューリップと黄色いチューリップがあります」となる。「チューリップ」が二回出てくるので、一つにしなさいと言うと、「赤いと黄色いチューリップがあります」と言うであろうが、もちろんこれは初歩的な間違いである。形容詞をつなぐときはどうするかを思い出しても、「赤くて黄色いチューリップがあります」としか言え

ないはずである。この場合は名詞に換えて「赤と黄色のチューリップがあります」という答えしかありえない。色彩語には名詞、形容詞、形容動詞が共存する語があるが、今問題にしているのはそのことではなく、「安くておいしい店」とか「親切で優しい先生」とは本質的な違いがあるという点である。「赤くて黄色いチューリップがあります」は同一のチューリップが二つの色を同時に持っている場合にのみ言える表現であるのに対して、「赤と黄色のチューリップがあります」は同一のチューリップの場合でも別のチューリップについて語っている場合でも用いられる表現である。「安くておいしい店」、「親切で優しい先生」は同一の店や先生について述べている表現である。日本語には複数形がないため、さらに言えば、性数格の一致という文法現象が存在しないために生じる曖昧性である。

「～て」と違って「～たり～たりする」は順序関係が重要でないという特徴がある以外に、「学生たちは京都へ行ったり、奈良へ行ったりしました」と「（わたしは）学校へバスで行ったり自転車で行ったりします」とでは違いがある。この違いは主語の数が複数か単数かの違いが関与している。前者は同じ学生のグループが京都と奈良の両方に行った場合以外に、京都へ行ったグループと奈良へ行ったグループがある場合にも使える。後者は普通の解釈では同じ日にバスと自転車の両方を使うということにはならない。「学生たちは京都や奈良へ行きました」、「（わたしは）学校へバスや自転車で行きます」の場合も同じ曖昧性がある。「や」を「か」に換えると曖昧性がなくなる。

Are you studying ↑German or ↓French?（↑は上昇イントネーション、↓は下降イントネーションを表す）を日本語に訳すと、「ドイツ語を勉強していますか、（それとも）フランス語を勉強していますか」となり、「勉強していますか」が二度現れる。一度で済ませるためには、「勉強しているのはドイツ語ですか、（それとも）フランス語ですか」としなければならない。これはＳＯＶ型の言語の宿命である。しかしAre you studying German or ↑French?を日本語に訳すと、「ドイツ語｛か／または／あるいは｝フランス語を勉強していますか」となり、「勉強していますか」は一度で済む。ついでに言うと、orに対応する日本語は前者では「それとも」であるのに対し、後者では「または／あるいは」である。これは疑問のscopeが関係しているからであり、二つの疑問文をつなぐときは「それとも」が用いられ、一つの疑問文の内部にある名詞句をつなぐときは「または／それとも」が用いられるということである。「か」は節末に現れれば疑問助詞であり、名詞句間に現れれば接続助詞である。

14. 誰のことか

初中級の漢字読解のテキストに以下のような文がある。試験で下線の部分の「見て」の主語は誰かという問いを出題すると、「子供」と答える学生が少なからずいる。また「本人」とは誰かという問いにも、「親」と答える学生がいることがある。

> 戦前の見合い結婚では、紹介された相手を<u>見て</u>親が気に入れば子供は結婚しなければならなかった。しかし、今の見合い結婚では親が気に入っても<u>本人</u>が気に入らなければ断ることができる。

日本の伝統的な結婚のしきたりを知らないとしても、正解してもらいたい問題である。日本文化に関する知識と文法知識とはいちおう別のものである。その証拠に、「お正月とちがって、おぼんは休日ではありません」は、ａ．お正月もおぼんも休日ではありません。ｂ．お正

月は休日ですが、おぼんは休日ではありません。c．お正月もおぼんも休日です。d．おぼんは休日ではありませんが、お正月も休日ではありません。のうちのどれと同じかという問いにはほとんどの学生が正解する。

次の手紙文も初中級の読解のテキストにあるものである。下線の述語の主語ないし経験者格（実際にはこの用語は用いていない）は誰かという問いを出題すると、前者は正解率が高いけれども、後者を「木村さん」と答える学生がいる。

前略

先日はお食事にご招待くださり、ありがとうございました。大変おいしい料理をごちそうになりました。あんな料理が毎日食べられるとは、木口さんがうらやましいかぎりです。

（以下略）　　マイケル・ブラウン

これは何を物語っているかというと、表面上に現れていない語を正しく探し当てるという能力が欠けているということであり、自動翻訳等で必ず必要になる知識である。実は初中級レベルの教材では、こういったタイプの文型に関する情報が不足しているようである。日本語では代名詞の多くがゼロ代名詞化するために、学習者にはわかりにくいが、主節と従属節との関係及び、従属節の主語をマークする格助詞（ほとんど「が」になる）に関しては十分に教えておかなければならない。「彼女はみんなに見られたので、泣いた」のような、従属節の主語が主節の主語と同じになるように受動文にして主語をゼロ代名詞化する（省略する）現象が日本語にはあふれている。「窓を開けて富士山を見ました」と「窓を｛開けると／開けたら｝富士山が見えました」のような文型に関して、「と／たら」は主語変換を誘発することが多いという事実を指摘しておくことも大事である。

15. お風呂に入ってから寝ます／お風呂に入ったから寝ます

表題の後者の文の従属節を丁寧体にした「お風呂に入りましたから、寝ます」は学習者には優しいはずである。ある種の従属節は丁寧体でなく普通体が使用できることを説明する必要がある。

16. 「電話をかける」、「お風呂に入る」、「映画を見る」とはどういう行為か

「～るとき」の用法は（1）「ご飯を食べるとき、箸を使います」のような従属節と主節が重複している同時関係もしくは（2）「夜寝るとき『お休みなさい』と言います」のような主節が従属節に時間的に先行する関係、一方、「～たとき」の用法は（3）「バス停に着いたとき、バスが出ました」のように主節と従属節とが瞬間的に同時である関係もしくは（4）「朝起きたとき『お早うございます』と言います」のような主節が従属節に時間的に後続する関係に大別できる。

「電話をかけるとき、『もしもし』と言います」は、（2）の場合に該当する。（2）の「～るとき」は「～る前に」に置き換えることができ、（4）の「～たとき」は「～たあとで／～てから」に置き換えることができる。ところで、「電話をかけるとき、テレフォンカードを入れます」はどの場合に該当するかということを考えてみると、もちろん（2）の場合である。しかし、よく考えてみると、大変面倒なことになる。電話をかけるとき、何をし、何が起こっているかを順に列挙してみると、A受話器を取り上げる、Bテレフォンカードを挿入す

る、C番号を押す（ダイヤルする）、D相手側のベルが鳴る、E相手がいれば受話器を取る、F相手（もしくは）こちらが「もしもし」と言う、G話が始まる、のようになる。「電話をかけるとき、テレフォンカードを入れます」を上述の（2）の場合と解釈した場合、「電話をかける」のはCあるいはCからGまでの行為である。一方「電話をかけるとき、『もしもし』と言います」を上述の（2）の場合と解釈するなら、「電話をかける」はCからEまでの行為ではなくGという行為である。なぜなら、もしCからEまでの行為であれば、「電話をかけたとき、『もしもし』と言います」となるはずだからである。「電話をかけたとき、誰もいなかった」はDまでの行為である。英語の場合はEFGがあって初めてcallledと言えるという説がある。「電話をかけるとき、いつも立ったままです」は上述の（1）の場合に該当する。したがってこの場合の「電話をかける」のは通話行為全体を指す。

「お風呂に入るとき、体を洗います」と「お風呂に入ったとき、体を洗います」はどちらが日本語として自然かというと、後者のほうである。この場合「お風呂に入る」は「風呂桶に浸かる」ではなく、「入浴する行為全体」と解釈される。先に体を洗ってから風呂桶に浸かる場合も、先に風呂桶に浸かってから体を洗う場合も、「お風呂に入ったとき、体を洗います」と言える。したがって、脱衣行為以後であれば、浴室内にいれば、先に体を洗おうが、あとから洗おうが「お風呂に入ったとき、体を洗います」と言えるわけである。「～たとき」となるのは、入浴行為の開始時点より後に体を洗うからである。しかし入浴行為の終了時点より後ではない。「その映画を見たとき、涙が出ました」も同じように解釈できる。しかし、「その話を聞いたとき、涙が出ました」の場合、「涙が出る」のが話の開始時点より後であれば、途中であろうが、話が終わっていようが、かまわない。この差は何によるのであろうか。

17. 熱いのをください／私のはどれですか

「熱いコーヒーをください」の「コーヒー」を「の」に置き換えて、「熱いのをください」と言うことができる。一方、「私のコーヒーはどれですか」の「コーヒー」を「の」に置き換えると、「私のコーヒーはどれですか」となってしまい「の」が二つ続くので、一つ消さなければならない。しかし、どちらの「の」が消えるのかを決める基準は存在しない。

「AとBとどちらが好きですか」のAとBにそれぞれ「（スポーツを）見る」と「（スポーツを）する」を入れると、「こと」または「の」という補文標識が必要になり、「スポーツをすることと見ることとどちらが好きですか」または「スポーツをするのと見るのとどちらが好きですか」になる。この答えとして「Aのほうが好きです」に「（スポーツを）見る＋こと／の」を入れると、「（スポーツを）見ることのほうが好きです」、「（スポーツを）見るののほうが好きです」となる。このうち前者は許容できる形式であるが、後者は許容できない形式である。「の」が二つ続く場合一つ消せばよいのであれば、「（スポーツを）見るのほうが好きです」となるが、これも正しくない。もう一つの「の」も消して、「（スポーツを）見るほうが好きです」としなければならない。「白い車のほうが速いです」の「車」を「の」に置き換えると、「白いののほうが速いです」となり文体的には美しくない、「の」を一つ消して「白いのほうが速いです」にすると非文になる。「白いほうが速いです」なら正しくなる。「私の車のほうが速いです」の「車」を「の」に置き換えると、「私ののほうが速いです」となり文体的には美しくない。「の」を一つ消して「私ののほうが速いです」は非文になる。

「私のほうが速いです」なら正しい。しかしどちらの「の」が消えるのかはやはりわからない。

「こと」及び「の」に関する形態にはさらに「である」と「だ」の互換性、「という」の随意性、「だの」を「なの」に義務的変換する必要性（h→l）等、以下のような現象がある。名詞の場合だけを示すことにするが、形容動詞の場合も同じようになる。

a	鈴木さんが病気	である	という	こと	を	知っていますか。
b	鈴木さんが病気	である	という	の	を	知っていますか。
c	鈴木さんが病気	である		こと	を	知っていますか。
d	鈴木さんが病気	である		の	を	知っていますか。
e	鈴木さんが病気	だ	という	こと	を	知っていますか。
f	鈴木さんが病気	だ	という	の	を	知っていますか。
g	＊鈴木さんが病気	だ		こと	を	知っていますか。
h	＊鈴木さんが病気	だ		の	を	知っていますか。
i	＊鈴木さんが病気	な	という	こと	を	知っていますか。
j	＊鈴木さんが病気	な	という	の	を	知っていますか。
k	＊鈴木さんが病気	な		こと	を	知っていますか。
l	鈴木さんが病気	な		の	を	知っていますか。

18. 具体名詞／の／こと

「メキシコで地震があったという<u>ニュース</u>を知っていますか」の「ニュース」や「「大臣が企業から多額の現金を受け取っていた（という）<u>事実</u>があきらかになった」の「事実」を「の／こと」に置き換えることができる。また「クジラの先祖とラクダの先祖は同じだという話は本当ですか」の「話」や「人々が歌ったり騒いだりする<u>音</u>が聞こえてきた」の「音」を「の」に、「骨が折れている（という）<u>可能性</u>があるから、レントゲンをとってみましょう」の「可能性」を「こと」に置き換えることができる。以上の表現で知覚動詞構文の場合が「の」に置換可能であるということ以外、「の」か「こと」かの選択を説明するのは困難である。しかし「の」だけに限ると、コピュラ文では具体名詞を「の」に置き換えられるか否かには整然とした規則がある。具体名詞を「の」に置き換えられないのは、関係節のheadになっている場合であり、置き換えられるのは、分裂文の場合である。この考察はMasuda, Yuki（2000）に基づく。

コピュラにおける非対称性

関係節

（1）太郎が大切にしている｛もの／の｝はとても古い。

（2）あそこに座っていらっしゃる｛人／？の｝はお元気だ。

（3）太郎が生まれた｛所／*の｝はきれいだ。

（4）太郎が生まれた｛年／*の｝にはオリンピックがあった。
（5）太郎が朝ご飯を食べる｛時間／*の｝に花子は起きてくる。
分裂文
（6）あそこに座っていらっしゃる｛人／の｝は田中先生だ。
（7）太郎が生まれた｛所／の｝は東京だ。
（8）太郎が生まれた｛年／の｝は1970年だ。
（9）太郎が朝ご飯を食べる｛時間／の｝は午前7時だ。

19. 受動文マーカー

二項関係の文で述語が「創造、発明、発見」を表す場合は「によって」しか使えないとか、間接受動文には「に」しか使えないという選択の余地に曖昧性がない場合は簡単であるが、受動文の行為者をマークする形式は非常に複雑である。初中級レベルでは、以下に述べるような事柄は是非教えておくべきである。その第一は「に」を使うと、受益者を指すことになる次のような場合である。能動文に直せば一目瞭然であるが、名詞句が三つある文（三項関係）である。

三項関係
（1）答案用紙が試験官｛*に／から／*で／によって｝配られた。
（2）私は議長｛*に／から／*で／によって｝委員に任命された。
（3）大統領｛*に／から／*で／によって｝調査が命じられた。

二項関係でも「に」以外に「から」が使える次のような場合がある。
（4）彼は山田さん｛に／から／*で／*によって｝話しかけられた。
（5）この音楽は日本国民｛に／から／*で／?によって｝親しまれている。
（6）彼は犬｛に／から／*で／*によって｝かみつかれた。
（7）彼は人々｛に／から／*で／*によって｝尊敬されている。
（8）その子供は父親｛に／から／*で／*によって｝叱られた。
（9）彼の考えは多くに人々｛に／から／*で／によって｝支持されている。
（10）彼はみんな｛に／から／*で／*によって｝好かれている。

20. 私は大阪で生まれました／私は玉野という町で生まれました

「～という・・・」という表現に関しては、初級でも出現する項目であるが、なぜこの表現が使われるのかという点については十分には説明されていないようである。これは聞き手がその情報を持っていないと話し手が思っている場合には必然的に使用される。「大阪」に比べ「玉野」は認知度が低いと考えられるから、「という」が必要になる。疑問文では、話し手がその情報を持っていない場合に「という」が必要になる。田中さんを探しているとき、「田中さん、いますか」は話し手が「田中さん」を知っている場合には使えるが、よく知らない状況では、「田中さんという方、いますか」となる。ただし、話し手は田中さんをよく知ってるが、聞き手がよく知らないと思われる場合にも、「先生の授業に、田中さんという学生はいましたか。」のように疑問文で「という」が現れる。

外国人日本語学習者は、知らない言葉に遭遇した場合、「～は何ですか」と質問することが

多いが、「～というのは何ですか」とすべきであり、この表現形式は是非定着させたいものである。

21. 否定の位置

文の否定の仕方についてまとめておきたい。例文として、（1）あした雨が降るでしょう、（2）あしが雨が降ると思います、（3）早く歩いてください、（4）先生のところへ行ったほうがいいです、を考えることにする。（1）の否定は「あした雨が降らないでしょう」しかありえない。（2）の否定は「あした雨が降ると（は）思いません」が出てくる可能性が高い。「あした雨が降らないと思います」も可能であり、こちらのほうが自然であるという事実及び、否定辞上昇（Negative raising）（主節が「思う」のようなnon-factiveな述語の場合、従属節の否定要素を主節に繰り上げても知的意味は変化しない）について簡単に示しておく必要がある。「知る」のようなfactiveな述語が主節にある場合は、否定辞上昇が起こらないことを「あした雨が降るということを知っています」の否定文を考えさせることで認識させなければならない。つまり、「あした雨が降らないことを知っています」と「あした雨が降るということを知りません」は知的意味が異なる。（3）の否定は「早く歩かないでください」という既習の表現であるが、古風な言い方として「早く歩きなさるな」という言い方があったことを付け加えてもよかろう。（4）の否定は「先生のところへ行かないほうがいいです」が正しく「先生のところへ行かなかったほうがいいです」は誤りであること（ただしモンゴル語では可能）、「先生のところへ行ったほうがよくありません」は問題外であることを説明しておく必要がある。

参考文献

Alphonso, Anthony (1974) Japanese Language Patterns, a structural approaqch, Vol. II, Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.

Chinami, Kyoko (1989) 'An Analysis of the Meaning and Usages of the S + No Desu Construction, 大江三郎先生追悼論文編集委員会編（1989）『英語学の視点』319-352

今尾ゆき子（1993）「「ノニ」の機能」『名古屋大学人文科学研究』（名古屋大学大学院文学研究科人文科学研究編集委員会）第22号75-84

井上理恵、清水邦子著（1990）『日本語の聴解　初級から上級まで聞きながら現代日本の知る』社会評論社

益岡隆志編（2006）『条件表現の対照』シリーズ　言語対照〈外から見る日本語〉6、くろしお出版

Matsuda, Yumi (2000) 'An Asymmetry in Copular Sentences: Evidence from Japanese Complex Nominals Headed by -no,'『言語研究』17, p.3-36.

酒入郁子、佐藤由紀子、桜木紀子、中村史子貴美子、中村壽子、山田あき子（1991）『外国人が日本語教師によくする100の質問』バベルプレス

戸村佳代（1989）「日本語における二つのタイプの譲歩文　―「ノニ」と「テモ」―」『文藝言語研究・言語編』15（筑波大学　文芸・言語学系）

吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』（神戸大学文学部国語国文学会）第15号 pp.46-55

（かくどう　まさよし　本センター教授）